

報 告

第24回日赤図書室協議会研修会に参加して

高橋眞由美

3月の総会・研修会の席で、日赤図書室協議会の会員より第24回日赤図書室協議会研修会・公開講座の案内をいただいた。開催日は7月7日、8日で、国立国会図書館東京本館の見学の他興味があるプログラムで構成されており、4月に参加受付が始まるとすぐに申し込みをした。

研修1日目の7月7日は、国立国会図書館東京本館または東京大学医学図書館（本郷キャンパス）の見学で、私は国立国会図書館を見学した。

参加者集合後、各15名ほどの2班に分かれて館内を案内していただいた。本館と新館があり、2階部分に連絡通路がある。本館は完全な中央書庫式で、一辺45mの正方形の書庫棟を一辺90mのやはり正方形の閲覧室・事務室のある事務棟が取り囲んでいると説明され、通路の一角からその大きさと収蔵能力を想像した。新館では、書庫は外気の影響、地震の揺れが少ないことからすべて地下1階～地下8階となっている。この地下書庫では地下8階まで外光が届くよう、また書庫内で働く人に安心感を与えるため、中央に光窓が設けられている（写真）。

利用者カウンターでは、搬送用のベルトコンベアで資料が運ばれてくる様子を見て、資料の多さと利用者の多さを実感した。

機会があれば次は利用者として訪れてみたいと思った。1日目の日程はこの見学会で終了、解散後は病院図書室協議会の仲間とホテル近くでお酒を楽しみながらいろいろ語らった。

2日目の7月8日は日赤会館で開かれた公開講座に参加した。

午前中は、聖路加国際大学図書館の河合富士美氏が「地下鉄サリン事件を振り返って：テロ災害時の病院図書室の役割」の演題で講演された。サリン被害者の受け入れを中心に行った病院で司書として検索や資料の準備を通して医療をサポートした経験談はたいへん興味深かった。当時の報道を思い出し、最近の世情を思うと事件から20年以上経っていても過去の出来事にできないという思いを持った。今後いつどこで起こるかかわからないさまざまな災害—バイオテロリズム、化学災害、自然災害、放射線災害などに対して、想定マニュアル、対応マニュアルの準備、災害時対策訓練の必要性を説かれた。

昼休みにランチョンセミナーとして、株式会社カーリルの吉本龍司氏がカーリルの紹介をされた。カーリルはサイトを覗いた程度で利用したことはなく、入門編として聞くいい機会だった。

カーリルとは、全国6,700館以上の図書館のOPACを横断検索できるウェブサイトで、貸出状況もわかる。吉本氏がカーリルをスタートさせたきっかけは、ある図書館システム更新の仕事をした時にOPACがあまり利用されていないのに気づき、検索などの工夫をすれば利用しやすくなり図書館が楽しい場所になるのではないか、と思ったことであるという。

合わせてカーリルの活用方法について例を示された。一例として、CiNii Booksで所蔵館検索をした時、検索結果画面下にカーリルのアイコン

が表示されることがある。このカーリルのアイコンをクリックすると、その検索対象資料をカーリルに所蔵登録している館が表示される。

また、Libron（リブロン：Library+Amazon）というツールについて説明された。これは、Amazon から最寄りの図書館の蔵書を検索できるツールで、登録は必要だが、Amazon をOPAC 代わりに使えるそうである。図書にかかわるユニバーサルサービスの拡充を目指してカーリルは進化中であるようだ。ちなみにカーリルとは「借りる」から作った造語だそうである。

午後の部では、埼玉医科大学附属図書館の田口宣行氏が「医学雑誌の動向～毎年の値上げの理由？」を講演された。ご存知のように雑誌価格は、出版社の市場寡占、円安、学術誌値上がりに加えて課税のため毎年高騰が続いている。対応策のひとつとしてのコンソーシアムについて話された。また、オープンアクセス論文掲載料と雑誌購読料の二重課金への対応として出版社が購読料を割引くオフセット契約、また研究者がいかに価格高騰を問題視しているかを表す Sci-Hub（サイハブ）という論文入手サイトのインパクトについて説明され、新しい知識を得ることができた。

次に、国立成育医療研究センターの森臨太郎氏が「コ克蘭の日本における活動」を講演された。

森氏は2017年当時コ克蘭日本支部の代表をつとめ、かつて大阪府立母子保健総合医療センター（現大阪母子医療センター）に在籍しておられた小児科専門医である。

コ克蘭日本支部は2014年に国立成育医療研究センターで組織された。2017年1月にNPO法人となり、人員の選出等において透明性のある組織になったと説明された。

講演の中で印象に残ったのが、外国では患者や市民などの医療消費者も情報提供、コメント投稿などを通してコ克蘭の活動に参加しているという話であった。医療を自分達のものとし

て能動的に活動にかかわることができるのは素晴らしいことだと思う。またコ克蘭ジャパンでは、これから若手のサーチャーを増やしていきたいと言われた。自分も何かできないか考えていたら、アブストラクトのボランティア翻訳者について触れられ興味を持った。早速登録を済ませ、現在翻訳作業中である。作業の過程では図書室での仕事の経験も役に立っており、また関連してデータベースや検索などについても関心が高まり、活動参加の副産物だと思っている。

最後の講演は東京医科歯科大学の阿部潤也氏による「機関リポジトリを知る」であった。

リポジトリについてはKINTOREの研修会などで知識を増やしていたので、余裕をもって話を聞くことができた。阿部氏は、リポジトリを通して研究物を研究者の手に戻そうと熱く語られた。

リポジトリへのアクセスとして、PubMedや医中誌Webにも機関リポジリアイコンが表示されるようになるなど改善が進み、論文がより入手しやすくなってきている。また、東京医科歯科大学ではILL依頼件数が多いものをOA化することにも留意しておられるようだ。リポジトリへの登録条件、著作権などを自分の中で曖昧なところについて引き続き勉強が必要だと



感じた。

今回の見学会・研修会では、自分の知見を広げることができてたいへん有意義だった。それぞれの講演について、日赤はもとより済生会などの参加者の積極的な質疑応答もあり盛況であった。

日赤の皆様には終始、親切丁寧に対応していただき、緊張の中にも楽しく気持ちよく過ごせた2日間であった。日赤病院図書室の結束の強さと懐の深さ、ホスピタリティを感じた。

日赤の皆様、講師の皆様、そして参加の皆様の熱意に元気をいただき感謝している。